

ヴィクトリア朝イギリスにおけるクリノリン・スタイルの革新性 —1856年のフープ・クリノリンの登場—

長谷部 寿女士

はじめに

産業革命をいち早く経験し、「世界の工場」としての地位を確立したイギリスの成功を支えていたのは製鉄業の発達であった。「鉄道狂の時代」と呼ばれたヴィクトリア朝は鉄道網の敷設が進展し、19世紀に入ると鉄を材料とした鉄道駅や橋梁などの建築物が次々と出現した。何より鉄とガラスが大規模に投入されたクリスタルパレスは、ロンドン万博の会場として、鉄の生産を牽引する「世界の工場」であることを誇示した建築であった。

軽く強靱な「鉄」は当時の女性ファッションにも取り入れられ、女性の身体意識を変える重要なファッション・アイテムを生んだ。そのアイテムとは、「クリノリン」とよばれるスカートを成形するための器具である。鉄製のクリノリンはファッションとテクノロジーが結びついたヴィクトリア朝を象徴する服飾品である。このクリノリンがミドルクラスの女性ファッションを「機能的」なものにする起点となった。

本論文では1840 - 60年代のミドルクラスの女性ファッションを取り上げ、身体の舗装具として論じられてきたクリノリンが実はいかに女性の身体に運動をもたらし、いかに女性の身体意識を変容させたのかを明らかにしていく。

1. ペティコート・タイプのクリノリン—ダンディズムと「家庭の天使」

(1) 「家庭の天使」の理想像

産業革命によって台頭したミドルクラスは、19世紀になって経済を動かす存在へと成長していった。ミドルクラスといっても明確な定義づけがなく収入や職業、出身も多様であったが、大部分が工業に関わる職業に就き工業化の恩恵を受けた人々であった。彼らは都市にある職場で決められた時間を働き、家に戻るという生活を送り、仕事場から切り離された家庭は完全なる私的空間になった。夫が家を空けている間、家事に従事し居心地の良い空間づくりをすることが女性の役割となったのである。そこで形成されていったミドルクラスに特有の女性像が、コヴェントリー・パトモアの長編詩（1854-63）のタイトルに由来する「家庭の天使」という女性像であった。この語が普及するのは1860年代であり、鉄製のクリノリンがまさに大流行している時期にあたる。新聞や雑誌のコラムや挿絵などの様々な媒体で「家庭の天使」の語が繰り返し使用されたのは、社会の発展に伴って活動的になっていく若い女性たちを戒めるためであり、男性たちは理想化した「家庭の天使」という女性像を作り上げたのだ¹。彼らが称揚したのはヴィクトリア朝初期の保守的な女性像であり、その女性たちが着用したのは「動かない」ことを美德としたファッションであった。その家庭の天使を体現する服装とはどのような

ものであったのだろうか。つぎにヴィクトリア朝初期の女性ファッションについて詳しく見ていきたい。

(2) 1840年代のクリノリンペチコート

厳格なモラルの意識を要求したヴィクトリア朝初期において、ミドルクラスの女性ファッションは「繊細さ」、「慎ましさ」が何より重んじられた。指南書として当時のミドルクラスの女性に広く読まれていたエリス夫人の『イギリスの娘たち』(1842年)には、ファッションについての言及もある。そこには「もし純粋な心を持っているならば、若い女性たちは肩を顕わにすることが繊細さ、愛らしさに欠いていることを本能的に知っているでしょう。(中略)正しい心を持つ女性がドレスについて目指すべき最も高い指標は、相応しいこと、つまりは目立たないという点である。」²とあり、エリス夫人は服装の華美さを競い合うことは百害あって一利なしと言い切っている。

ヴィクトリア朝のファッションを論じたアリソン・ガーンズハイムが「ヨーロッパの女性ファッションが、1840年代ほどにリスペクタビリティと黙従と依存を表していた時代は後にも先にもない」³と述べているように、ドレスの色はダークブラウンやダークグリーンなどの暗色に、細いストライプや小花柄などの控えめなプリント模様が好まれた。戸外ではレースや花をふんだんにあしらったボンネットが必ず着用された。髪の毛を包み顎まで覆うボンネットは慎ましさのシンボルとされ、パラソルと共に重要な装飾品であったのだ。過度な装飾をつけないドレスは実物を見ると簡素にすっきりと見えるが、動かないことを前提としたこのドレスは着用時には見た目よりもずっと重くなった。その重さの要因はスカートにボリュームを出すために何枚も重ね穿きをしたペチコートにあった。藁の芯などを縫いこんだフランネルや絹、木綿などの布地を糊で固めた下穿き用スカートは、硬くごわごわとしていた。このペチコートを通常は4枚から6枚ほど重ね穿きし、冬場は分厚いフランネル製のペチコートを重ねたため10キロ以上にもなったといわれている⁴。このような重々しいペチコートを身につけた女性は主に立つか座るかの限られた姿勢を取ることであり、必然的に活動範囲も制限された。ヴィクトリア朝初期の女性ファッションはこのような重々しい服装が主流であり、「動かない」ことを女性たちに要請したのである。しかし、そうした状況のなかで1840年代半ばにペチコートの素材に変化が見られた。フランスから伝わったジュボン・デ・クリノリンと呼ばれた馬の毛を麻の布地に縫い込んだペチコートである⁵。イギリスではクリノリンの語は用いられず、「ペチコート」もしくは「ドレス拡張器 (dress-dilator)」と呼ばれていた。このペチコートが登場すると、「軽くなって、涼しい」と評判を呼んだ⁶。馬の毛を使用したクリノリンは張りが強く、これまでの何十枚も重ねていた布のペチコートの重量を減らすことができたのだ。ヴィクトリア朝の初期には女性の身体は「ふくよか」であることが理想とされ、大きく広がったスカートはそうした豊かさ、優雅さの指標とされていた。村松昌家は、クリノリンのシルエットは自身が労働をしないこと、つまり有閑・消費生活を誇示するファッションであり、1810年代から1830年代まで上流階級の男性社会で流行した「ダンディズム」の理念を引き継いだ現象であったと述べている⁷。ミドルクラスの女性たちは、優雅な上流階級のファッションを模倣することで「完璧な婦人」を目指したのである。それゆえクリノリンの登場によってスカートの

幅はさらに広がっていった。行き過ぎたファッションは次第に非難の対象となり、メディアには頻繁に取り上げられるようになる。

(3)『パンチ』に描かれはじめた女性ファッション

1841年に創刊された週刊誌『パンチ』はミドルクラスを読者層とし、彼らの価値観を体現したものであった。そこに掲載されている挿絵は当時の社会を鋭く描写したものであり、風俗に関する風刺も数多く見られる。とくに女性ファッションは創刊当初から風刺の対象となった。それだけファッションがミドルクラスの関心を集めたということだろう。

1840年代後半から1850年代はじめの風刺は「被り物」に集中していた。例えば「家庭の喜び」(1847年)と題された挿絵(図1)では、若い女中が鏡の前で女主人の新しいボンネットをこっそりと被り、うっとりとした表情を浮かべている。『パンチ』に頻繁に登場するボンネットは、1840年代に女性たちが「慎ましさ」のシンボルとして外出する際に必ず着用したものである。とりわけ婚期にある年頃の女性たちはボンネットの流行に敏感で、ファッションプレートには様々な装飾を凝らしたボンネットが紹介されている⁸。1850年代に入るとボンネットに代わり、陽射しを避けるためにより実用的なつばの大きいハットが流行した。その背景には、鉄道の敷設が進んで郊外に住むミドルクラスが気軽に都市や観光地に出掛けることが可能になり、野外にいる時間が長くなったことがあった。女性の行動範囲が家の周囲に限られていたボンネットの流行時には、その時着用していた大きく広がるスカートは風刺の対象になっていない。しかし、ハットの普及とともに次第に女性が外出するようになるにつれ、公共の場で巨大なスカートを着用した女性たちが風刺の対象となった。1850年代はファッションの風刺対象が帽子からスカートへと移行した。例えば、1856年の諷刺画では、クリノリンを着用した女性が小さな馬車に乗りこむところを傍にいる少年たちが「これから面白い手品を見ることができるぞ」と揶揄している様子(図2)や、クリノリンで広がりすぎたスカートを穿いた妻の隣で、エスコートができない夫の様子が描かれている⁹。初期のペチコートタイプのクリノリンの構造と大きさは、外出には不便であり、舗装されていない道では塵や埃をスカートに巻き込んで衛生的にも問題があった。このように1850年代はファッションの風刺対象が帽子からスカートへと移行した。鉄製のフープ・クリノリンが特許を取得した1856年の7月には、このクリノリンがいち早く記事の中で紹介され、翌月の8月号には風刺画に描かれている(図3)。

2. フープ・クリノリンの登場, 1856年—「動く」身体へ

(1) 製鉄技術の発達

馬の毛を入れたペチコートタイプのクリノリンが1846年に登場した後は、骨組みの部分に様々な素材を用いてスカートの幅を広げることに熱意が注がれたが、1856年に画期的なクリノリンが登場し『パンチ』にはいち早く取り上げられた。それは鉄を用いたフープ型のクリノリンである。鉄を用いたクリノリンのブームは1850年代末から60年代の半ばまでつづき、クリノリン産業に大量の鉄が投資された。製鉄業で知られたシェフィールドの工場では、一週間

に50万個分のクリノリンの鋼を製造していたと記録されている¹⁰。

このクリノリンは18世紀に着用されたファージンゲールと呼ばれた腰に装着する鉄の枠（フープ）の進化型だった。蝶番式になった鉄のフープを組み合わせたファージンゲールは1760年頃のジョージ3世時代に製造されるようになり、横に大きく張り出した鉄のフープは狭い入口を通る際には両手で持ち上げてコンパクトにすることができた¹¹。しかし、こうした機能的なファージンゲールは、宮廷や貴族階級の間でのみ流行した贅沢な装置であり、一般の女性は簾や小枝をリボンで繋いで作ったものを着用して貴族のスカートのシルエットを模倣した¹²。1780年には古代ギリシャ服を模倣するファッションが流行すると、ファージンゲールを用いたファッションは完全に姿を消してしまった。その後、ヴィクトリア朝時代に再びスカートを広げるシルエットが流行し、1856年にファージンゲールが進化したフープ・クリノリンが登場したのだった。このクリノリンは、製鉄技術の発達により安価で生産されるようになり、労働者階級にまで浸透した。クリノリンの作り手である労働者階級の女性たちにも手に入る価格になっていたのである。こうした広範な流行を推し進めたのは、短時間で大量生産を実現した製鉄技術によるものであり、クリノリンが登場する前年の1855年に登場した「転炉法」という画期的な製鉄の方法であった。

イギリスの製鉄業は19世紀に入り、銑鉄よりも強靱な「鋼」の製造が可能になっていた。しかし、一回の鋼製造にかかる作業時間は10時間に及び、生産できる量も限られていたことから、いまだ実用的ではなかったのだ。そこにイギリス人のヘンリー・ベッセマーが、燃料を用いずに鋼を量産する「転炉法」を生み出し1855年に特許を取得した。この転炉法は、木炭や石炭などの燃料を使わずに銑鉄自体に含まれる炭素やケイ素などの成分を利用して精錬する、これまでの常識を覆す手法であった。ベッセマー法によって鋼を無制限に製造できるようになり、クリノリン産業を促進した。1850年代末には鉄製のクリノリンが庶民にも着用されるようになっていた。ヴィクトリア朝を代表するジャーナリストであるヘンリー・メイヒューの1865年の著書には、「いまやクリノリンは、女王から皿洗いの女中、3歳の少女まで、あらゆる女性たちが着用している（中略）クリノリンは、莫大な商業利益となっている。」¹³とクリノリンがあらゆる階層に普及していたことを証言している。

(2) パラソルとクリノリン

大量生産され安価になった鋼は、服飾品の材料としても積極的に使われるようになった。女性たちに必須の装飾品であったパラソルには、クリノリンに先立って鉄が使用されている。この傘の製造は、クリノリンの発達とも密接に結びついていた。

傘の文化史を研究したT.S. クローフォードによると、イギリスでの傘の製造は1780年代から始まるが、パラソルが必携の流行品として需要が高かったのに対し、重くて大きな雨傘は田舎じみた労働者階級の持ち物とされていた¹⁴。しかし、1840年代になりスリムで実用的な雨傘が登場し需要が高まると、製造業者の数が増加した。さらに、植民地から簾や鯨骨、象牙などの材料を無税で輸入できるようになったことにより、傘産業が確立されていった。傘の製造は、基本的に男性の職人が工場で親骨フレームの組み立て作業を行い、その後お針子たちが作業場や自宅で布を張る仕事を請け負っていた。親骨は、簾や鯨骨、鯨ひげなどでつくられ、

1840年代末には鉄製のものが登場している。これらは全てクリノリンの骨組みにも使われた材料だが、実は傘の製造業者がクリノリンの製造に転向した例や、クリノリンとパラソルの両方を請け負ったという記録もあり、製造工程に共通する部分があった¹⁵。

鉄製のクリノリンはフランス人のR.C. ミリエットが発明し、1856年4月にパリで特許を取得したのが最初とされる¹⁶。イギリスには、フランスとの仲介業者であったC. アメットが1856年7月に「スケルトン・ペチコート」の名で特許を得て知られるようになった。スケルトン・ペチコートは、鉄のフープを垂直に張り付けた布のテープで固定したものであった。初期の頃はボリュームのあるドーム型で、『パンチ』（図3）に描かれているようにパラソルの形とも一致している。パラソルの形状は、1860年代になって雨傘と兼用できるしっかりとした大きめのデザインが好まれ、親骨と柄の部分には鉄が使用された。一方でドーム型のクリノリンは、1850年代末からスカート幅が広がりはじめ、1862年にピークに達している。このようにクリノリンとパラソルという1860年代のモードに欠かせない服飾品には、鉄という素材が使われ、その形状も共通の特徴を有していた。さらにクリノリンとともに着用されたコルセットにも鋼が用いられるようになり、それまでのコルセットを堅くする材料であった木材や鯨の骨、象牙などに取って代わった。1860年代以降のコルセットは、鉄を入れたバスケットを Cotton の布地に縫い込んだものが主流となり、バスケットが折れにくく、錆びつかない工夫をした改良品が次々に登場していた¹⁷。

これらのアイテムは全て製鉄技術の発達之恩恵を受けて急成長したものであり、テクノロジーとファッションの結びつきを象徴するものであった。

(3) クリノリンの製造—着用者と制作者の親近性

以上で見たようにクリノリンの製造は傘産業の発達と関わりを持っていたが、工場では具体的にどのような工程で作られていたのだろうか。

イギリスでのクリノリンの製造は、後に自動車製造で有名になったプジョーと、アメリカに本社を持つトムソンという2つの会社が知られ、1858年から1864年の間の毎年、この2社が合わせて2400トンのクリノリンを製造していたとされる¹⁸。ロンドンに設立されたトムソンの工場は、千人以上の女性従業員を擁して一日4000個ものクリノリンを製造していた¹⁹。鋼の製造技術が格段に発展していたイギリスでは、アメリカやフランスの工場よりも大規模に製造を行っていた。

クリノリンの製造工程は、先ずフープをつくることから始まる。ロッドに巻かれた鋼を炉の中に入れて柔らかくした後に、鋼の表面に付いた汚れを酸で除去し、ライ麦の粉をふりかけて専用の機械で乾かす。次に、乾かしてまだ柔らかい状態の鋼をリールから引き出しながら19番の型の太さになるように伸ばし、もう一つのリールに巻き付けていき、この鋼をサイズ別の直径に合わせてフープ状に変形する。均一の太さでつくられたフープの鋼がある程度固まると、最後に鋼の周りに糸を巻きつけて仕上げ、次の作業場に送り出すのだ。

フープをスカートの形に整えていく次の工程は女性の従業員が行った。ウエストバンドから一番下の枠まで、およそ9個から18個までのフープを布製のテープで巻いて固定する工程は、全て手作業で行われた。図12はトムソンの製造工場を描いたものであるが、仕上げの工程を

行う若い女性従業員たちは自身もクリノリンを着用して作業を行っている²⁰。流行のクリノリンを纏った女性たちは、1840年代に盛んに議論された「お針子」たちの低賃金・長時間労働によって憔悴しきった様子とは対照的な姿である（図13）。お針子たちが縫うのは彼女たちが決して着用することのできない高級なドレスだった。作り手側と着る側の相反するこうした女性の姿は、当時のモード産業の需要と供給の社会的な矛盾を浮き彫りにしていた。しかし1850年代のクリノリン産業では、着用する側だけでなく作り手側もモードのファッションを享受し、着用者と認識を共有していた。それゆえ改良されたクリノリンのデザインを商品化する際にも、作り手側の女性たちによって製造が迅速に進んだ。さらに、着用者と制作者の一致は商品の宣伝効果にもなり、モードのファッションがこれまで以上に大衆化していった。フープ・クリノリンは、消費者側の女性のみならず製造工場に働く女性たちによって、その流行が支えられていたのである。

3. フープ・クリノリンの改良

(1) クリノリンによる事故

1項(3)で見たように、パンチには1850年代になって大きく広がるスカートを着用した滑稽な女性の姿が頻繁に描かれるようになっており、鉄製のクリノリンの風刺画は特許を取得した翌月の1856年8月にいち早く描かれている。図4の『パンチ』の挿絵では、警官が鉄のフープを持った少年に向かってそれを渡すように注意しているところを、クリノリンを着用した女性が自分に向けられた言葉と勘違いして急いで立ち去ろうとしている。この絵にみるように、男性側のクリノリンに対する態度は総じて批判的だった。1858年には「クリノリン、鉄製フープの危険性」というパンフレットが出版され、クリノリンによって引き起こされた様々な事故を取り上げて使用禁止を呼び掛けている。パンフレットの序文では「しばらく前から、最大級の悪事が健康上、倫理上、そしてこの国の幸福を深刻に侵害している。それはクリノリンという不可解な名前で権威づけられた滑稽で不合理なファッションである。」²¹と述べられ、衛生面や事故の危険性が問題視されただけでなく、過剰なクリノリン・ファッションは女性のモラルを墮落させるとして道徳的観点からも非難されている。というのも、1860年代は、これまでタブーとされた足首の見える丈の短いスカートを穿いたミドルクラスの女性が議論的となっていた。クリノリンによってスカートがふくらみ持ち上がることにより、足首が見えるようになり、スカートの下に下着を穿く習慣がなかった当初は肌が見えてしまうことに激しい非難が集まったのだ。1868年の『サタデー・レビュー』紙に「当世娘 (the girl of the period)」という記事が掲載されると、大きな反響を呼んだ。彼女たちは「ファッションで他人に優ることだけに熱意を注ぎ」、虚栄心から流行を追いかける「娼婦のような女性」だとされた²²。「家庭の天使」という女性像がこの時に喧伝されたのは、こうしたスキャンダラスな若い女性たちの台頭に危機感を感じたヴィクトリア朝社会の対応策であったといえる。²³

1785年の創刊以来イギリスを代表する新聞として普及し、19世紀にはミドルクラスに最も読まれていた『タイムズ』にもクリノリンは取り上げられた。初出は1853年の10月号の広告

記事であるが、この広告の対象となっているクリノリンは馬の毛を入れたペチコートタイプのものである。鉄製のクリノリンが登場するのは、4年後の「クリノリンの並はずれた猛威」(1857年)と題してその流行を伝える記事で、これ以降「クリノリンの災い」(1858年)、「教会でのクリノリン」(1860年)、「クリノリンによる事故」(1862年)といずれも公共の場で起きた惨事を報道したものがつづいた。中でもクリノリンによる火災事故の報道はしばしば見受けられた。スカートの広がり peaked に達した 1862 年にはアメリカの新聞にも取り上げられ、その記事では、著名なイギリス人医師が一年間のクリノリンによる死亡者数はロンドンで 75 人、国全体では 750 人に及んだと報告している²⁴。医学雑誌の『ランセット』にも、「世間の嘲笑や非難、そして丸焦げの恐怖をなくすためには、このファッションを追放することだ。」²⁵と述べられており、さらに翌年の号でも「もう 1 件の火災による死亡者は、今の読者にはお馴染みの話題であるが、ドレスが燃焼し拡張したクリノリンによって犠牲になってしまった。」²⁶とクリノリンの事故が取り上げられている。このように大衆紙だけでなく専門誌でもクリノリンの話題は頻繁に掲載された。しかし、こうした激しい非難が巻き起こってもなお、クリノリンの流行は収まる気配すらなかった。版を重ねてミドルクラスに愛読されたチャールズ・イーストレイクの『家具、室内装飾、ディテールのヒント (Hints on Household Taste)』(1868)には、「クリノリンは実にあさましい発明品だが、その下品さと過剰さへの非難にも関わらず、その流行は収まることはない。」と述べられている²⁷。『タイムズ』に「昔の話 (An Old Story)」と題してクリノリンが過去のものとして語られたのは、ようやく 1870 年に入ってからのことであった²⁸。

(2) フープ・クリノリンの改良品—軽量化・柔軟性

フープ・クリノリンは 1856 年の登場後、相次いで引き起こされる公共の迷惑行為や事故の報道を通してその危険性が真剣に議論された。こうした問題を受けて、制作者側はデザインの改良をおこない、工夫を凝らしたクリノリンを生みだしている。フープ・クリノリンが一過性の現象に終わらず約 10 年もの間流行が続いたのは、動き易さに配慮した改良品が次々に考案されていたからだった。

そのような改良品の従来のクリノリンとの相違点として、第一に鉄製クリノリンの軽量化を挙げることができる。布を何枚も重ねてはいたペチコートタイプのクリノリンよりも鉄製クリノリンは軽かった。軽くなったことにより、スカートを容易に広げることができるようになった。例えば 1861 年に特許を取得したマンチェスターのヘンリー・クックが考案したクリノリンは、鋼を波形に整えたものを重ねており、真上から見ると個々の幅が綿密に計算されていることがわかる (図 5)。この工夫によって、上から着用するドレスの襞を波型にあわせて均等につくることができる。パテントブックにはボリューム感だけでなく布地を美しく見せることにも考慮したと説明がある²⁹。

第二の相違点として、柔軟性が挙げられる。鋼は柔軟性があるため、自在に形状をつくることができたのだ。鯨の骨や籐で作られたクリノリンは狭い場所は通れない上、座った時にすぐに折れてしまい頻繁に修理をする必要があり、買い替える手間もかかっていた。馬車に乗る際にはクリノリンを取り外さなければならず、図 6 のようにクリノリンを外部に吊るして通りを

走る馬車の光景がよく見られた。この点で、柔軟性のある鋼は折れる心配がなく、座った時にも簡単に壊れることはない。さらに座ることを考慮した改良品として、図7のクリノリンのように座るときに椅子とバネが接触しないようにヒップの部分に空洞をつくったものや、図8のように、前面の膨らみを抑え、スカート上部から中間部にはフープを入れずにテープで鋼の骨組みを吊るしたものが制作された。これらの鉄製クリノリンを着用すると、座るという動作を容易に行うことができ、馬車や鉄道に乗るときに逐一外す必要がなかった。さらに、鉄製のクリノリンは蛇腹式の構造で簡単に折りたたんで収納することができ、旅行時には専用のケースに入れて携帯することもできた（図9）。

このような機能的なクリノリンによって歩くことが容易になり、女性たちの身体の運動性は高められた。フープ・クリノリンが登場した当初の1850年代後半期には、軽くて捲れやすいクリノリンのスカートから脚が見えてしまうことが問題になっていたが、鉄製フープが広く普及した1860年代には、ドロワーズというズボン型の下着を穿くようになってそうした懸念も解消された。イギリス人女性の日記には、叔母にフープ・クリノリンを初めて着用したときの印象を尋ねた時のことが記されている。叔母は「そのクリノリンが登場するまで、それほどの快適さを感じたことは決してなかった。[フープ]クリノリンはベチコートを取り払い、大変軽やかに容易に歩くことを可能にしてくれた。」³⁰と返答しており、クリノリンの着用によってこれまでの身体観が一変したことがわかる。クリノリンと共に着用されたコルセットにも鉄を用いた製品が登場し、女性の身体意識はこれまでとは大きく変化していたのだ。こうして、女性たちはクリノリンを着用して登山をし、乗馬やクロケットなどのスポーツも行うようになった（図10）。ヴィクトリア朝の画家オーガスタス・エッグが1862年に描いた《旅の道づれ（*The Travelling Companions*）》（図11）には、列車のコンパートメントに向かい合って座る2人の若い女性が描かれているが、彼女たちはクリノリンを着用して座っている。一方は読書をし、他方は眠っている2人の女性の表情からは、とても寛いだ印象が読み取れる。堅く折れやすいこれまでのクリノリンでは深々と腰を掛けることは不可能であったが、この女性たちに見るように柔軟で軽いフープ・クリノリンは座ることを容易にしていた。

ミドルクラスの女性たちの身体意識を変え、そこから日々の活動を促したのは鉄を用いたフープ・クリノリンであった。そして、この時からモードのファッションも外観の華やかさだけでなく、着心地や動き易さにも重点が置かれるようになったのだ。

おわりに

本論文では、1840年代から60年代のクリノリン・スタイルに焦点をあて、鉄製のフープ・クリノリンの革新性について明らかにしていった。クリノリン・スタイルの特徴であるスカートのシルエットは、何枚ものベチコートを重ね履きしてボリュームをつくっていたため非常に重く、歩くことさえ不自由だった。それゆえ、ヴィクトリア朝初期の1840年代のクリノリン・スタイルは身体の動きを拘束するファッションであった。しかし、1850年代以降のクリノリン・スタイルは、それまでと一変して活動的なファッションになった。それは鋼という最新の素材

を用いたフープ状のクリノリンの発明によるものであった。鉄はクリノリンやコルセット、パラソルなどの流行の服飾品の材料として積極的に取り入れられ、ヴィクトリア朝期のモード産業を支えていた。製鉄技術の恩恵を受けて大量生産が可能になったクリノリンは、労働者階級にまで普及し、クリノリンの作り手である女性たちにも着用されるようになった。あらゆる階層に広がったクリノリンに対して、メディアは批判的な態度でクリノリンの廃止を主張したが、流行が収まることはなかった。というのも、当時のパテントブックや広告記事に明らかなように、鉄の利便性を活かして動き易さの工夫をしたクリノリンが次々に登場していたのだ。その考案を取り入れて改良品を生み出すことができたのは、作り手側もクリノリンを着用し、改良点についての認識を共有していたからであった。こうしてクリノリン・スタイルは1860年代末まで流行が続いた。1870年代にはバスル・スタイルが主流となるが、臀部を誇張するこの新たなシルエットも鉄製の器具によって形づくられ、鉄は体のシルエットを形成する下着に欠かせない素材となっていた。その起点は1856年の鉄製フープの登場であり、1840年代から60年代の約30年間のスカートが大きく広がったクリノリン・スタイルは、1856年を境目として、ペチコートを重ねた重々しいファッションから一枚のクリノリンとズボン型の下穿きという動きやすいファッションに一変した。シルエットの上では一見すると変化はないものの、機能面において大きな変化を遂げていたのだ。こうして女性たちは積極的に野外を歩くようになり、新たな身体意識を獲得していくのである。フープ・クリノリンは、身体を考慮したファッションが主流になっていくこれ以降のファッションモードを考えるうえで、その起点となる重要なアイテムであったといえる。

図版



図 1

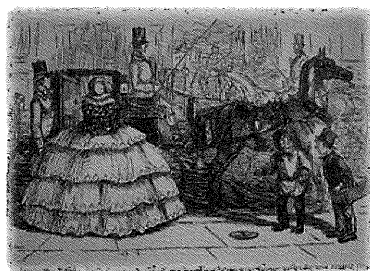


図 2



図 3

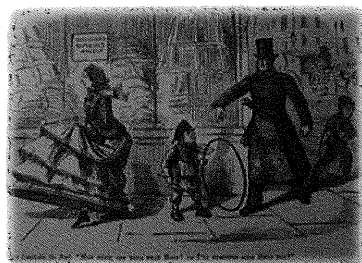


図 4

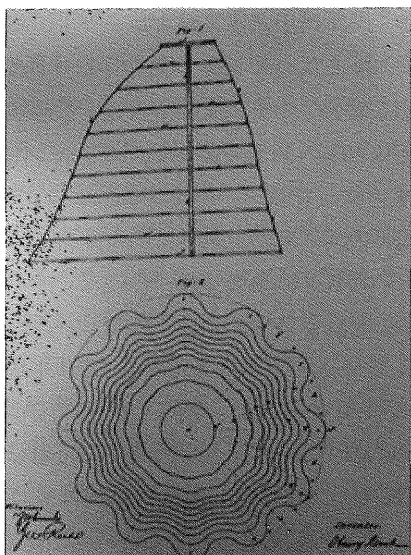


図 5

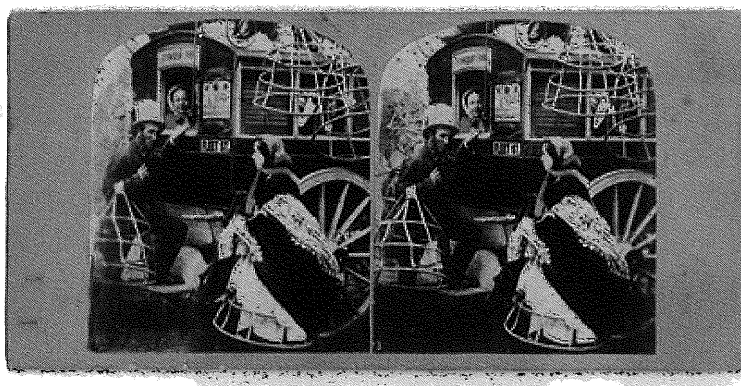


図 6

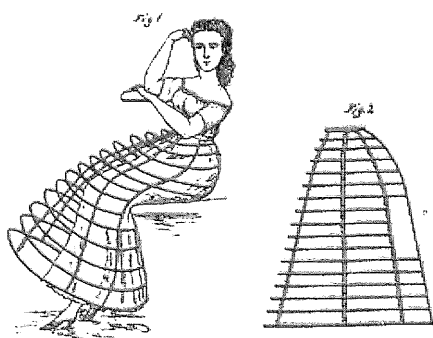


図 7

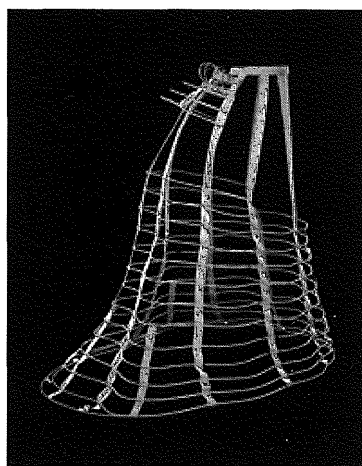


図 8

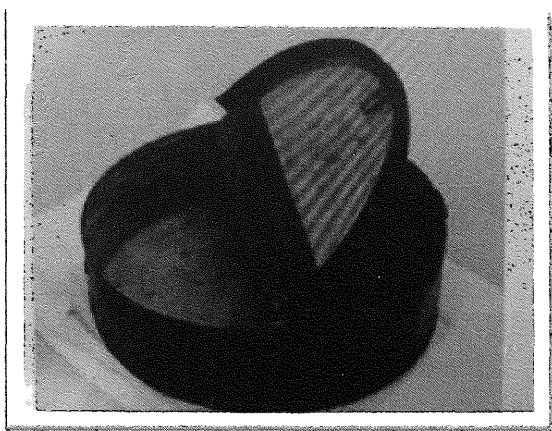


図 9

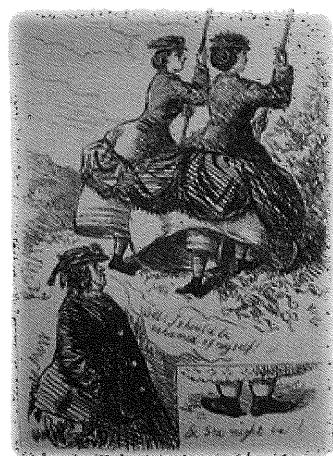


図 10



図 11



図 12

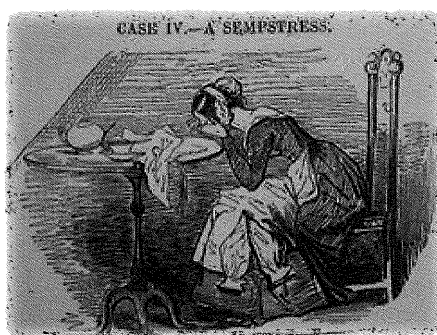


図 13

図 1. *Punch* 13 (1847) 200.

図 2. *Punch* 31 (1856) 34.

図 3. *Punch* 31 (1856) 73.

図 4. *Punch* 31 (1856) 214.

図 5. クリノリンの改良型 (*Report of the Commisioner of Patents for the Year 1861* (Washington: Government Printing Office, 1863))

図 6. クリノリンをの外側に吊り下げた馬車 (1861) The Howarth-Loomes Collection, National Museums Scotland.

図 7. クリノリンの改良型 (<http://www.thefullwiki.org/crinoline> 最終アクセス 2015 年 11 月 13 日)

図 8. 鉄製フープ・クリノリン (1863-72) ロンドン、ヴィクトリア & アルバート美術館所蔵.

図 9. クリノリン専用のケース (1861-70) 京都服飾文化財団所蔵.

図 10. *Punch* 45 (1863) 178.

図 11. Augustus Leopold Egg, *The Travelling Companions*. 1862. Oil-on-canvas. 65.3 × 78.7cm. Birmingham Museums and Art Gallery. (<http://www.bmagic.org.uk/objects> 最終アクセス 2016 年 1 月 5 日)

図 12. トムソン社のクリノリン製造工場 (セシル・サンローラン著, 深井晃子訳『女性下着の歴史』(Wacoal, 1982) 111.)

図 13. *Punch* 6 (1844) 220.

¹ パトモアの詩を賞賛したヴィクトリア朝を代表する批評家のジョン・ラスキンは、自らも 1864 年の講演 (『胡麻と百合』) で女性の理想的なあり方について具体的に示し、ミドルクラスの女性に大きな影響を与えた。

² Sarah Stickney Ellis, *The Daughters of England: Their Position in Society, Character & Responsibilities* (London: Fisher, 1842) 226.

³ Alison Gernsheim, *Victorian & Edwardian Fashion: A Photographic Survey* (New York: Dover Publications, 1963) 25.

⁴ 戸矢理衣奈『下着の誕生』(講談社, 2000) 21.

⁵ 馬の毛を入れるというアイディアは、もともと 1830 年に軍人のタイカラーに張りをもたせるためにフランス人が考案したもので、1846 年にスカートに応用された製品が初めて登場した。

⁶ Gernsheim (1963) 27.

⁷ 村松昌家『一九世紀ロンドン生活の光と影—リージェンシーからディケンズの時代へ』(世界思想社, 2003) 34-57.

⁸ 1844 年にパリから伝わったボンネットは「ボンネットの暗殺者」と呼ばれ、「それなりに可愛らしい女性をとびきり魅力的に見せる」と紹介されている。Gernsheim (1963) 29.

⁹ *Punch* (22 November 1856) 210.

¹⁰ Willett Cunnington, *English Women's Clothing in the Nineteen Century: A Comprehensive Guide with 1117 Illustrations* (New York: Dover Publications, 1990) 205.

¹¹ 行吉哉女『英国服飾史』(神戸女子短期大学研究部, 1953) 134.

¹² 玉川長一郎「コルセットの功罪」『Soen eye』28 号 (文化女子大学ファッション情報科学研究所, 1997) 37.

¹³ Cristopher Breward, *The Culture of Fashion* (Manchester: Manchester University Press, 1995)

160.

¹⁴ T.S. クローフォード『アンブレラ』別宮貞徳・中尾ゆかり・殿村直子訳（八坂書房, 2002）165-179.

¹⁵ 例えば 1862 年の工業部門のカatalogには、シェフィールドの工場でクリノリンのフープと傘のリブ、釣針を製造していた記録や、チープサイドのレナルドという会社がクリノリンのワイヤーと傘用のフレームを製造していたという記述がある。*Official Catalogue of The Industrial Department, International Exhibition 1862* (London: Truscott, Son & Simmons, 1862) 98-99.

¹⁶ Gernsheim (1963) 45.

¹⁷ Julie Wosk, *Women and the Machine: Representations from the Spinning Wheel to the Electronic Age* (Baltimore: The John Hopkins University Press) 61.

¹⁸ Alison Matthews David, *Fashion Victims: The Dangers of Dress Past and Present* (Bloomsbury Publishing, 2015) 161.

¹⁹ Gernsheim (1963) 46.

²⁰ 1860 年代にニューヨークのクリノリン工場で働く女性たちを調査したジョン・レアンダーは、軽快で楽しげに作業を行っている数百人の若い女性たちの活き活きとした工場の様子を記録している。Wosk (2001) 51.

²¹ *The Dangers of Crinoline, Steel Hoop &c* (London: G. Vickers, 1858) 1.

²² *Saturday Review* (14 March 1868) 339-340.

²³ 1880 年代には、仕事を持ち、自由に発言・行動をする女性が台頭してくるが、佐々井啓はこうした「新しい女」の前身として、1860 年代の「当世娘」について言及している。（佐々井啓『ヴィクトリアン・ダンディーオスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」』（頸草書房, 2015）141-142.）

²⁴ *The Nashville Daily Union* (20 November 1862) 2.

²⁵ “Fireproof of Fabrics”, *Lancet* vol.74 no.1891 (26 November 1856) 544.

²⁶ “Death by Fire”, *Lancet* vol.76 no.1939 (27 October 1860) 418.

²⁷ Charles Eastlake, *Hints on Household Taste in Furniture, Upholstery, and Other Detail* (London: Longmans, Green, 1869) 232-233.

²⁸ *The Time's* (26 October 1870) 11.

²⁹ *Report of The Commissioner of Patents for the Year 1861* (Washington: Government Printing Office, 1863) 537.

³⁰ Gwen Raverat, *Period Piece: A Cambridge Childhood* (London: Faber and Faber, 1952) 260.